

機関番号：34407

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720169

研究課題名 (和文) 象徴天皇制の思想的基盤に関する研究—知識人を中心として—

研究課題名 (英文) Research on the people's thought base of Shocho Tenno System

研究代表者

河西 秀哉 (KAWANISHI HIDEYA)

大阪産業大学・教養部・非常勤講師

研究者番号：20402810

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、第一次世界大戦後から 1950 年代後半までを対象時期として設定し、象徴天皇制の思想的基盤の解明を試みようとしたものである。第一次世界大戦後の世界的君主制の危機を踏まえ、日本でも近代天皇制の再編に関する構想が提起された。昭和戦前期にももちろん断絶した部分もあるが、構想が継続し、敗戦後へと繋がった。それは、大衆化・現代化といった問題への対応だったと考える。

研究成果の概要 (英文)：

This study tried to set everything from after World War I to the 1950's as object time, and to try the clarification of the people's thought base of Shocho Tenno System. The plan concerning the reorganization of Modern Tenno System was instituted also in Japan based on the crisis of the worldwide monarch system after World War I. The plan continued, and was connected after it had defeated it though was also the part where the game against came to a rupture of course at the first term at the Showa era. It was an action on the problem like the popularization and the modernization.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史学

キーワード：象徴天皇制、知識人、天皇制、マスコミ

1. 研究開始当初の背景

近年も天皇制に関する議論は盛んである。その中で、研究開始当初に取り上げられていた女系・女帝論議に代表される現代の天皇制論を見ると、天皇制維持が議論の前提として存在していることがわかる。なぜこのように、

天皇制は日本社会に必要であるとの意識が存在しているのか。また象徴天皇制をめぐる議論が現代においても活発になったことから鑑みると、日本社会にとって象徴天皇制とはいかなる存在であり、制度であるのかが、根本から問い直されているとも言える。この

問題を解明するためには、「日本人にとって天皇制とは何であるのか」を問う必要があるのではないかと。

もちろん、この問題は戦後歴史学にとって重要かつ根本的なテーマとして、これまでも多くの議論が積み重ねられてきた。しかし議論がし尽くされ、結論が出されたわけではない。むしろ、「天皇制感覚の静かな地殻変動」が進行していると言われる現代において、なぜそのような事態が起こっているかを、歴史的な考察を通して象徴天皇制をめぐる動向を検討し、問い直す必要があるのではないだろうか。

以上のように本研究は、天皇制という日本の歴史において最も重要な研究課題に対して、その現代的な存在意義を歴史哲学的に洞察しようとし、現在の象徴天皇制に関する諸問題にも繋がる重要な意義を持つテーマであると考えた。

2. 研究の目的

以上の背景やそれまで研究動向を踏まえ、私は次の三つの課題を設定した。すなわち、A象徴天皇制の思想的基盤・天皇像を解明する、B天皇制と国民との関係を直接的に示す具体的な事象を取り上げて研究を進める、X象徴天皇制の構想・形成を戦後のみならず戦前から検討する、という課題である。ABについてはすでに私が取り組んできたテーマである。本研究ではそれを継続して取り組む課題とし、深化に努めた。Xについては、戦前、特に大正デモクラシー期の第一次世界大戦前後の世界史的な君主制の危機、アジアを含めていくつもの君主制が解体していったという時代状況の中で、戦前天皇制が受けた影響、新たな天皇像の構想を、戦後天皇制と関連づけて、天皇制をめぐるその連続／非連続の様相を解明しようと試みた。その際、ABの課題に引きつけることを目指した。すでに

そうした方法論については、私も書評などで提起してきたが、本研究によって本格的に開始した。本研究の特徴は、象徴天皇制の形成定着という課題を、大正デモクラシー期から「大衆天皇制」の成立までの長期的視野から考察しようとする点にある。戦前・戦時中の天皇制の様相を考察し、占領から1950年代の天皇制の危機という事態の中で、戦前期の天皇像の模索がもった歴史的意義を究明することを目的とした。こうした長期的視点にたった研究方法によって、象徴天皇制の構想と展開、象徴天皇に関わる諸事象の解明はよりいっそう確かな成果が得られるものと確信し、研究を進めた。

3. 研究の方法

本研究では特に、知識人による天皇制構想と象徴天皇制論を新聞・雑誌・著作などの刊行物や一次史料から検討した。対象時期を戦後直後に限定するのではなく、戦前から戦後の長い視野を持って考察することで、象徴天皇制の基盤を明らかにしようとした。こうした史料の丹念な検討も、これまでの研究ではほとんどなされていなかったこともあり、本研究は象徴天皇制をめぐる思想的基盤・天皇像に関する事実の確定という観点からも、独自性があると考え、研究を遂行した。

一年目は大正期から敗戦直前までの戦前期に集中して資料収集に努めた。具体的に調査した対象は、①著作、②一次史料、③新聞・雑誌などである。具体的に取り上げた知識人として、吉野作造や長谷川如是閑などの大正期を代表するデモクラット、戦後になって大正教養主義者と呼ばれるようになるアメリカ史研究者高木八尺、法学者田中耕太郎、政治学者矢部貞治らの言説を検討した。

①の史料については、従来の研究が津田左右吉・和辻哲郎など特定の知識人に限定されていたことから、本研究ではより多くの知識

人の著作を収集し、分析した。前述のデモクラットの思想については多くの研究が存在するが、彼らのデモクラシーに関する言説が主に取り上げられ、天皇制をどのように構想していたのかという点については、必ずしも解明し尽くされたわけではない。本研究では、彼らの構想が象徴天皇制へと連続していったのかの解明を試みた。

②の史料については、国立公文書館（東京）、外務省外交史料館（東京）などで史料を収集した。こうした公文書館などに知識人に関する一次史料が存在している背景には、彼らが当時の政策に深く関与し、知識の提供を行っていたためである。そうした場において、知識人は天皇制に関する構想を発表していた。

③の史料は京都大学図書館、京都府内の図書館での収集のみならず、全国の新聞雑誌史料を網羅する国立国会図書館（東京）での調査を行った。当該期の知識人は積極的に新聞雑誌に投稿したりインタビューを受けたりと、積極的な意見の展開を行っている。これに対する網羅的な研究はなされていないため、彼らの動向を解明する上でも重要な作業だと考えられる。

二年目は、引き続き史料収集とその分析を進めた。特に敗戦後から日本国憲法制定までを特に集中して調査分析を行った。前述した大正教養主義者と呼ばれた知識人はこの時期、様々な分野における第一人者として活躍し、また公的立場に就任するなど政治的な影響力も有していた。

①については、京都府内図書館などで継続するとともに、国立国会図書館など各地の図書館での収集を行い、広範な知識人の天皇制構想を明らかにすることを試みた。著作集などについても丹念に検討し、②や③で収集した史料との総合的な把握に努めた。

②については、多くの知識人を対象として

進める。国立公文書館、外務省外交史料館の所蔵する一次史料には、敗戦直後に知識人によって書かれた天皇制論や天皇制に対する意見への聞き取り記録（ともに未刊行）が収録されており、その史料を手掛かりとして、知識人による言説を広範に考察した。彼らは、体系的かつ特徴的な天皇制論を展開しており、彼らの言説の検討を通じて、知識人による象徴天皇制の構想をより広く解明するとともに、これまでの研究では解明されてこなかったそれぞれの差異を抽出し、それが象徴天皇制という制度へと結実する意味を考察した。

③については、国立国会図書館などでの新聞・雑誌史料の収集分析を継続するとともに、各地図書館における地域マスコミ、占領期の地域コミュニティー紙を収蔵している国立国会図書館憲政資料室プランゲ文庫での収集・調査も行い、こうした媒体に対して発表された言説の調査と分析を実施した。

最終年度は①②③とともに、これまでの方法論を踏襲して、知識人による言説を広範に考察した。「象徴」と規定された天皇制がいかに内実を伴っていくのか、その思想的基盤の解明に努めた。また、それまでに収集しきれなかった史料について、網羅的に発掘に努めて収集した。

4. 研究成果

上記の研究方法によって、大正期から高度経済成長期までの広範な史料を収集することができた。研究成果の柱は主に次の二点に集約される。

第一に、戦前からの天皇制の連続性と断絶の側面である。第一次世界大戦後の世界的君主制の危機を踏まえ、日本でも近代天皇制の再編に関する構想が提起された。それは、萌芽的な大衆社会の出現に即応した天皇制のあり方が求められたからによる。ここで近

代天皇制は現代化することが課題となったのである。ファシズム期として捉えられる昭和戦前期にも、その構想が継続した部分は存在する。総力戦体制は国民の参画を求める体制であり、それは大衆社会の帰結であったからである。そして構想は敗戦後へと繋がった。その意味で、象徴天皇制は近代天皇制からの大きな変革はあったにせよ、敗戦後にアメリカから全てがもたらされたものでもなかった。大正期・昭和戦前期の経験が、そこには連なっていたのである。この点については、「天皇制と現代化」としてまとめた。

第二に、敗戦後にスタートした象徴天皇制は最初から明確な定義づけが与えられておらず、その定着は高度経済成長期を待たなければならなかった。敗戦後、象徴天皇制をめぐる意見の相剋が顕在化する局面は何度も存在した。そこで交わされた思想が積み重なり、次第に「文化平和国家」の表象としての象徴天皇像が形成されていくのである。この点については、『象徴天皇』の戦後史』としてまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①河西秀哉、象徴天皇制・天皇像の定着－ミッチー・ブームの前提と歴史的意義、同時代史研究、査読有、第1号、33-47ページ
- ②河西秀哉、天皇制と現代化、日本史研究、査読有、582号、121-144ページ

[学会発表] (計3件)

- ①河西秀哉、ミッチー・ブームの歴史的意義とその前提－象徴天皇制・天皇像の定着に関する一考察－、近現代史研究会、2008年6月28日、名古屋大学
- ②河西秀哉、大正期、新しい国体論の試みとその帰結－永田秀次郎を中心として－、日本史研究会近現代史部会、2010年1月28日、機関誌会館
- ③河西秀哉、天皇制と現代化、日本史研究会大会近現代史部会、2010年10月10日、

京都大学

[図書] (計1件)

- ①河西秀哉、「象徴天皇」の戦後史、講談社選書メチエ、2010年、220ページ

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河西 秀哉 (KAWANISHI HIDEYA)
大阪産業大学・教養部・非常勤講師
研究者番号：20402810

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：